

四、儀式の制定

幽學は種々の儀式を制定し、之により社會一般の禮節秩序を立て、且つ嚴肅なる情操を玩味體得せしめた。(規式解参照)

第五節 豊業施設

一、道德と經濟の調節

農民道德を鼓吹し、道德と經濟の一致を計り、家庭和合と分相應を守ることを以て、農村繁榮の源としたる點は非常に卓見だ。

微味幽玄考に「夫今天下泰平の御世なれば、庶人に於ては孝を先として分相應の道を以て家内一つに和する時は、自ら作る禍なく、富める事疑ひあるべからず。……親子兄弟夫婦の中に、分相應の禮を以て能く和睦なれば其樂に其心至極穩かなるものあり。……又其和睦と業とを樂む事に至りては、物を費す暇なし。故に其富めること年々歳々朝日の

昇るが如くなるべし。……」とある。

幽學は道德を以て經濟其の他一切活動の原則とした。即ち經濟と道德との一致を計つたのである。

二、貯蓄の獎勵

父母を悦ばしめ、不時の災難に備へ、子孫永續を計る目的の下に、貯蓄の獎勵をした。然しながら吝嗇を堅く戒しめた。幽玄考に、

「……下愚は金の溜るに従つて、氣を付けざれば、甚だ危し。……家内中皆明けても暮れても、金の溜るのを語るに於ては、何時とはなしに其の親の喜ぶ顔を見るこよりも、金を見るのが樂となる故、道も規則も失ふなり。……故に、金の溜るが面白くなりたるには必ず、子孫滅亡の種たる幽言を能く味ふべし。」

と言つた。富は人生に重要性を有するものなるも、其の用法を誤れば、義理を捨て人情を殺し、人生を破壊するに至るものである。幽學は富の貯蓄を獎勵すると同時に、富の陥り易

き非人道的方面を警戒し、富と道德の圓滿なる調和を理想郷の貴重なる一面とした。

三、子孫三代後の計

幽學は常に「眼前の事に迷ふべからず。三代の後の事を思ひ考ふべし。」と説いた。即ち、一身一家を慮するに、百年後を考慮して計畫を立つる事を教へた。

人事の紛々擾々、多くは眼前の小利害に捉はるゝ所より来る。百年後の成果を望み、現在の活動を規矩せば、實に餘裕綽々、體胖に心廣く、而かも勤勉精勵せざるを得ない。幽學は程度低き農民にこの百年の計を教へ込み、よく彼等を信頼せしめ、納得せしめ、以て幽學独自の農民道を確立し、然る後次の如き驚天的の施設を實行した。

四、耕地整理の斷行

東總の地、幽學の活動地域は勿論、其の地方一般は明治、大正の時代に至り、漸く耕地整理が完成せられたるに過ぎざるに、已に天保、嘉永の間に耕地整理を斷行した。而かもそれが幕府其他権力者の威令によるにあらず、又外部より何等補助金の下附あるにあらず、全く

一浪人の人格の教化によるを思へば、徳化の偉大なるに驚かざるを得ない。先祖傳來の猫額大の田畑、これ彼等農民の生命線である。耕地を整理するには、これ等祖先傳來の土地を夫々交換せねばならない。畔道の新設、溝の疏通、堤防の築造、土地高低の地均等のため、土地の交換は止むを得ざる所である。幽學は諄々として彼等農民に耕地整理の必要、並に土地交換の止むを得ざることを説得し斷行した。而かも、今日の専門家より之を見るも、凡ての點に於て敢て遜色がないと言ふ。

五、一般農事心得

- 一、田草かき、一人分五畝積り。
- 一番廻り、植ゑてより十五日迄を定法とす。
- 二番廻り、十日目を定法とす。
- 三番廻り、植ゑてより三十日迄に済すを定法とす。
- 一、種は呻のきは、四本五本の内にて取るべし。少し青き中より抜きて水に入れ、浮き

たるをすくひ取り、沈み候を上として、萬の種物、右様に致してよし。

一、萬作り物は、實の入り能くする事專要なり。尤も肥しく仕様に有之由、肥し入方六ヶしく候。肥しは能く熟して古き程よし。

一、稻杯は、秋田の内、能く熟したる肥しを入れる、事專一なり。又耕し方も大切に候。

一、ほぎ過ぐるは、不熟の肥を、春に至り入る、故、から出來過ぎて、實の入り悪く候。又からがしつかりして居る稻は、家の入り宜しく候。是は世上に試し澤山有之候。

一、二本三本植急候株、八九本に成り、實の入り方宜しければ、米に取あきる也。尤も一株十二三本に出來ては、ほぎ過るなり。如斯成りては、米の取方少く成るなり。

一、麥杯の肥の仕様、稻に類す。尤も種の落し方、足あと一ツに七ツ八ツ位定法なり。

一、百姓は、田畑耕作する事大事なり。

一、米穀杯澤山取りたがらずとも、耕し方、肥の入れ方、田地を直す事のみ丹精して居りさへすれば、自然に米穀は澤山取りあがる者なる由、能々考への上致すべく候。眼

前の事と、行末の事を志すとの違ひなり。

一、身上滅亡之種と、子孫永續之規矩と成る種とに候。能々味ひ丹誠すべし。必ず相談を能く熟すべし。

附 印

● 並風印、尤東西南北風に隨ひ印すなり。

◎ 大風印

○ 小雨印

● 大雨印

△ 少しの曇り印

以上は帳面に記すものとす。

六、二毛作の獎勵

耕地整理の結果、灌溉、排水の便を生じたので、二毛作を爲し得る様になつた。

七、苗植付法の改良

特に婦人達を集め、容器に泥土を盛り、苗の植付方を習はしめた。收穫の第一歩は植付の適正にありと主張された。

八、住宅移轉の斷行

耕地整理の必要上、田畑を交換した結果、所有耕作地が自家より遠くなつた者を生じた。耕地の附近に居住するのは、經濟的で耕作上便益なる所から、遂に住家移轉をも計り、而かも不時の事變を慮つて、二戸宛軒を並べさせた。今日長部地方を逍遙し、或は丘の上、或は田甫のあたり、藁葺農家の二軒宛並ぶを見る毎に、幽學を偲ぶ情禁じ難きものがある。農業部落に於いて、先祖傳來の我が宅地家屋は何物にも勝り、愛著心深きものなるに、彼等は幽學の言ふ儘に、何等未練を残さず、唯々諸々として、其の宅地家屋を移轉したのを思へば、幽學の感化の偉大さも、此に至つては嘆味を帯びて來る様にさへ感ぜられる。

九、建築の様式を一定す。

經濟上、應接上、健康上の見地に基づき、建築の方法を一定した。現存する幽學の居室は全く自己の設計によるもので、一本の梁木を用ひざるも極めて堅牢である。

十、農民の服裝をも一定す。

幽學は質剛健の氣風を養成せんが爲め、服裝に大意に用ひられ、左の如く一定した。

イ、性學服の制定

禮服用の羽織は紺織の紋付、婦人用の禮服は木綿小紋の紋付。

平服は一切木綿物。

子供服は紺無地の筒袖。

下駄は松材、緒は竹の皮の自製品。

ロ、性學笠の制定

ニ、性學扇子の制定

ホ、性學茶碗の制定

皆實用向き、華を去り實に就き、堅牢安愼のものである。

幽學の門弟は起居、動作、言語、禮節は勿論、一本の手拭、下駄の鼻緒に至るまで、他の社會と異なり、色彩を極めて鮮明にした。質實剛健の氣風は流れ、相互に友愛の情は厚く、隣保互助の念は深く、團結の力は強く、實に別天地の存在をなして居た。恰も今日の伊太利のファツシヨ黨員、獨逸のナチス黨員より武器と暴力を取除き磨きをかけた者に類似する所があつたと思ふ。

第六節 理想郷大成の曙光

梢に綻ぶ一葉の若芽は天下の春を告ぐ。勝海舟は東海道筋の茶店の老婆より、往き來の浪士の片言隻語を傳へ聞き、以て來らんとする天下の大勢を察知し、潛に深く決意する所あつたと言ふ。

幽學の理想郷は精神界の王國である。物質の榮華、世俗の誇り、權勢の威力等外形的一時

的のものは全く眼中に無く、唯一片天地の和の別神靈の自覺と天人合一の哲理とを基調として救世濟民を圖り、而かも其の理想信念を六千農民の指の先き足の裏までも徹底せしめ、彼等の心神に一革命を起し、全く彼等を新人と改めた。左の一例は正に彼の理想郷に天下の春の來らんとするを示したものであらう。

當時幽學の許に來り學ぶものは、平日でも猶百人を下らなかつた。或日、長部の字茅場に天保錢數貫文を落した者があつたが、往き來の門人等は勿論、附近の婦女子供すら之を見ても手を付ける者無く、三日三晩地に塗れたまゝで放棄されてあつた、が漸く四日目に他國の通行人が之を拾ひ去つたと言ふ。

今から百年前、文化極めて低級な時代に、この事ありしを思へば、幽學の徳化の如何に大なりしかが想像し得られる。これは、彼の熊山蕃山が師を求めて、京都の旅館に投ぜし時同宿の者より聽ける、或る馬子の、その馬の鞍壺に結び付けたる旅人の遺失せし、二百兩の大金を拾ひて、苦辛搜索の後、その夜半落し主に返し、二十兩の謝金を固辭して、僅か賃錢と

して二百文を受取りたる話と、頗る相通するものあり、これは近江聖人中江藤樹先生の教化の車夫馬丁にまで及べるものなりと云ふに感じて、春山は藤樹先生を慕ひて、遂にその門人となりしは、人のよく知る所である。かくして幽學の教化徳化いよ／＼深く、いよ／＼高く、理想郷殿堂の大成近きものがあつた。彼の悦び、門弟等の待望如何ばかりであつたらうか。然るに、天は幽學に對しては別途の擁護を有し、之が殿堂を破壊せしめ、彼に自刃を命じたのである。

第五章 幽學語錄

道を行ふには安きよりすべし

道は人の履むべきものにして、人慾の私無き者は容易なるものなり。故に道を餘り六ヶ敷思ふべからず。道を六ヶ敷思ひ過るときは、道を勤むる事を廢するに至るものなり。故に余が道友達は、其の相應に知り易き勤め易きことより、漸々に學びて而して至善の地に至るべきなり。

善惡の標準

善きも惡きも人の行ひによりて定めるものなれば、善惡の標準極めて見易く、道友 同の利益を計り、道友と共に其樂みを樂み、共に其患を患ひ、過福吉凶是非得失共にすべきを以て善なりとし、之に反して他人を顧みず、自分而已樂み自分而已其利を貪らんと欲する者は惡なりと定め、如何なるはり合にも、惡きには移らずと心掛くべきなり。善惡を分つに餘り

六ヶ敷思ふべからず。其の所以は餘り六ヶ敷思ひ過ぎて的無しになるは、行ひを善くする所以にあらざるなり。理論は如何に幽邃高尚なるも是を行ふこと能はざれば、善行と謂ふことは能はざるものなり。善悪共に行ひの上にて分るべきものなれば、常に道心をして一身の主となし、良き事而已を行ふ事を心掛けざるべからず。

道に違ひても一度は是非がない二度はしかたが無いを恐るべきなり

道を行はんと心掛くる者は必ず是を行ふべきものなり。故に一度道に違ひたる時は是を取返す事は六ヶ敷ものなり。例へば朋友と交り信を失せんか、十度信實の行ひを爲すと雖も人常に是に疑を抱くものなり。彼の男は危しとや、何の人は先日の如きことなるものなれば油断すべからずと嚇するものなれば、人道を全うせんと欲せば、常に道に違はざる様能く意を用ふべきなり。若し道に背きたる行ひを爲しても、一度位は是非無し、二度位はしかたが無い、と云ふときは遂には習慣となりて、道を行ふべからざるに至らん。故に我が道友達は能く意を用ひ些少にても道に違ふことあるべからず。

他人の子も我子と均しく是を愛すべきなり

我子を他人の子より可愛く思ふは普通人の常なりと雖も、此の如くしては忠恕の道に非ざるなり。

我が道友達は常に心を用ひて此の道を守り、他人の子と雖も是を愛すること必ず我子の如くして、決して彼我の間に區別をなすべからず。

忿るときは事を爲すべからず

人は忿憤し易きものなり、物に觸れ折に觸れ、忿ることあり、憤ることあるべし。是れ人に採りて免るべからざるものなり。然らば其の忿るとき憤るときは決して事を爲すべからず。忿りて事を爲すときは、多くは粗暴に流れ、憤りて事に當るときは、多くは過誤に陥るものなり。人一度事を爲し言葉を發するときは、容易に是を取消すことを得ざるものなれば、忿憤の時に爲したる事に付ては必ず後悔するに至るものなり。

人慾の私を去るに非ざれば千萬卷の書を読むとも人を導くこと能はざるべし

凡そ人たる者は、人慾の私は去り難きものなり。故に道を行はんと欲せば人慾の私の萌を能く知りて、其の機の中に是を去ることを勉むべし。人慾の私を去る事を知らざれば千萬卷の書を読むとも、亦千萬言の教を聞くとも、鴉を鶯と見たるに等しく、何ぞ人を導く事を得んや。是皆私慢の爲す所なり。故に必ず私を去ることを能くすべし。

子供が人を悪く云ふときは知らぬ顔して居るべし

子供、人の悪き事の咄しをする時は家内中是れに答へず、知らぬ顔して居るを善しとす。若し其の咄を尤もに聞き、又是を善んで聞くときは、其の子たる者、人の悪しき事而已に意を注ぎ、遂には其の癖が習慣となり、成長の後穴探となるものない。

繕ひ學者に陥るべからず

頓才ある者は、其の辯を舌先に振ふが故に、人多くは是を以て才子なり利口なりと心得過て、其の才子を譽むる事に至つては、遂に繕ひ學者に陥り、聖人の言も唯口に知りて心に知らざるに至るべし、慎むべし。

後悔するは第一の學問なり

後悔すべし、何事も前日の行ひを省みて、誠の道に背きたるや、否やを察して、而して些しとても背きたる行ひあれば後悔すべし。後悔するは第一の學びなり。後悔して前日の行ひの耻かしきを知るべし。耻を知れば再び悪き行ひをせざるに至るべし。

情の薄きと厚きとは平常の行ひにて知るべし

人情を盡すことを知らざれば道は行ひ難きものなり。詩歌を作り俳句を読むも、人情を本とせざれば善き句を作ること得ざるなり。諺に曰く旅は路づれ、世は情けと云ふ如く、世の中は凡て人情が原となるものなり。人にして若し情に薄弱なるときは人たること能はず。

學問をするは行ひを勤めるが爲めなり

人は行ひを勤むるを以て第一とせざるべからず。善行を爲さんが爲めに學を修むるなり。如何に學理は深遠にして、議論は高妙なるも、其の所説と行ひとが合致するに非ざれば眞正の學者と云ふべからず。

變化盛衰は當然の理なり

世に變化盛衰の有る理由を知らざれば、學ぶと雖も益なし。世に變化盛衰の有るは、事物の當然の理にして、盛なるものは衰へ、生あるものは皆死す。万事皆然らざるはなし。

愚讓怯謙を守るべし

人たる者は其の子の善き事の外、見聞く事無く、常に愚讓怯謙を以て養育すべし。聰明叡智守_レ之以_レ愚。大馬鹿者を守_レ是るに利口を以てす。功被_二天下_一守_レ之以_レ讓。世人の嘲りに遇ふ是を有つて手柄顔を以てす。勇力振_レ世守_レ之以_レ怯。柔弱未練是れに陥るに握り拳を以てす。富有_二四海_一守_レ之以_レ謙。身上を亡す是を致すに氣高きを以てす。愚讓怯謙の四つを以てするは乾徳なり。人に於て天下を治むる心なりとす。

道友多きは幸ひなり

人は道友多く無くんば甚だ危し。其の所以は人慾の私の發することは、恰も汐の湧き出るが如く、止めんと欲するも止め難きものなり。其の甚しきに至りては、道心愈々微にして、

遂に道を失ふものなり。是に至りては其の志改め難きなり。嗚呼恐るべし。

艱難汝を玉にすと云ふ言葉能く味ふべし

己むを得ずして來る災は之を災と思ふべからず。即ち自ら作る災にあらずして、天我を誠しむるものなり。故に之を遂行せずして何をか爲さん。而して此の困難を遂行して其の終極に達するときは、天必ず之れに報ゆるに恩恵を以てするものなり。故に艱難汝を玉にすと云ふ言葉を能く味ふべし。

心廣く體寛なるときは病も少きものなり

我が道友達は常に心を廣くし如何なる災ありとも是れ天我れを誠むるものなりとなし、我れ此の厄運を退くるにあらざれば天道に反す、故に力を竭し身を致して、是れが回復に従事せざるべからず。故に災害に遇へば、其の度毎に勇氣を興振せざるべからず。故に身體を強壯ならしめんと欲せば、必ず心を廣大にして體を寛かならしむべきなり。

人に悪く言はるゝは皆自分が言はるゝ様にしたるなり

何程人に悪く言はるゝとも必ず悪敷思ふべからず。何となれば此れ皆自分が人に悪しく言はせたるものなり。自己に一點の私心無く、一毫の邪心無ければ、人必ず是を悪敷言ふものに非ず。自己に私心有り、邪心あるが故に人に悪敷言はるゝなり。故に人が我身を悪敷言ふことあらば必ず我身を省るべし。人に悪敷言はれて忽ち憤怒するが如き様では、とても道を行ふこと難きものなり。

男の口より出たる事は反古にならぬ事

人の一度意思を表示するときは是を取消すこと勿れ。故に其の表示する前に能く意を用ひて是をなすべし。一度意思を表示して後に、その表示を取消して反古と爲すが如きは、人として爲すべき道にあらず。

我が道友達は一度意思を表示するときは如何なる事ありと雖も是を行ふべし。若し難きものと思はゞ初より其の意思を表示せざるを宜しとす。言行一致は人の守るべき所にして、意思と表示と相合致せざるは誠實を破るの基なりと知るべし。

難_レ舍者義_{ナリ}

義は自己の生命を捨てても之を全うせざるべからず。若し義を全うする爲に生命を捨てざるが如きことあらば、速かに生命を捨てゝも之を全うすべし。義と生命と何れが重きとすれば、生命より義を以て重しとせざるべからず。生命の貴重なることは、何人と雖も之を知らざるものなしと雖も、之を義と比較するときは實に鴻毛より輕きものなりと謂はざるべからず。故に我が道友は假初にも義に反する行ひを爲すことなく、信義を以て之を行ひ、能く是を守り、義の爲には生命を惜むこと勿れ。

第六章 幽學の自刃

幽學臨終の地に頌徳碑がある。その碑文は東宮侍講文學博士三島毅の撰に係る。其の銘に曰く、

以^レ死諫^レ君 古有^二其臣^一 以^レ死諫^レ徒 今有^二斯人^一

宜^レ矣遺教 傳授日新 風俗敦朴 厥里維仁

死を以て君を諫めしは、古へ其の臣あり。死を以て徒を諫むる、今斯の人あり、宜なるかな遺教傳授して日に新に、風俗敦朴にして、その里これ仁なるは。

古より自刃する者は多い。君父のため、或は大義のため、或は士の面目のため。然れども幽學の如く死を以て門弟を諫むるもの他にこれ有りや。幽學居を丘陵に卜し、地形と云ひ、構造と云ひ、一見小城廓の觀を呈し、而も數子の門弟皆神の如く敬ひ、此に出入した。

封建の末期、密偵繁き時代に於て、この隆盛を極めたのであるから、何時か幕吏の睨む處

となるは、蓋し、免れ難き命數であつたらう。

遂に天魔の魅入る所となり、謂れなき讒訴により、罪なき聖者は、哀れ、五十五才にて囚はれとなり、家宅は搜索を受け、著書は没收せられ、七十年の間幽囚せられる運命となつたのである。

一點、疚ましき所なき彼は、幕末公行の裏面運動の如きは一切之を爲さず。飽くまで、公明正大に自己の心事を告白し、何等異圖なきを示した。

幽學は獄中より次の上申書を提出し自己の赤心を開陳した。

教導筋奉申上候

浪人大原幽學申し上げ候私門人共に相學ばせ候教導の始末御尋ねに御座候

此段心の運びを考させ其心の穢を洗ひ磨き學び候儀にて則ち心學に御座候都べて愚俗は己が心の惡きに運ぶを心付くもの無く知らず行狀惡しく相成り終に不孝不義に陥り候者故其の己れが心の運びを能く考へ其の惡きを改めざれば修身齊家相成り難く自然の富

貴に至る事無し若し自然にあらざりて求めて富貴に至れば不義の富貴に相當り其の積惡の家には必ず餘殃有り其の甚しきは子として親を殺す事にも至る是れ一朝一夕の故にあらず漸々由て來る所ぞと聖人仰せ置かれたる事故先づ己が心の惡きを知り其の惡き事に運ぶを考へ改心致すべき様相論し其の開込によつて天のなせる災は去り易く自ら作る孽ひは遁るべからずと謂へる杯の事譯詳に説き論し亦己が心の惡きは危き事の所以を能く知らしめ自身と改心を心付き候様教導致有レ之儀に御座候且其の理は相知れ候ても唯眼前の利慾に迷ひ居る族は改心すれば其の家齊ふ者か齊はざるものか杯と惑ひ候によつて或は大學八條目の意味を通俗の言葉を以て通俗の事毎に推し當て如レ此のもの故身修りだにすれば家内和熟して則ち自然の富貴に至る必ず、眼前の事に離るべし杯相論し其の是を開込候序に不義の富貴は有つべき所以なき理を能く心得させ其の得心に乗じて其の樂みを樂みとし其の利を利とするは惡を積み殃を招く所以にして恐しき事と思ふに至らしめ又人惡きを好むに至ては善き事心に失せて唯惡事のみ思ふ是れ則ち心にも惡積

る故善きを思ふも其の如く、皆心に積りて大いなる災を引出すと、大いなる喜び來るとの味ひを相學ばせ或は孝經に髮一毛も龜略にせざるは父母に受くる身體髮膚故とばかり思ふべからず諸事萬端に付て毫髮も父母の心を毀ひ傷らざる事杯と相論し其の味ひを知りたるはずみに是迄知らず不孝せし事を考へさせ唯々父母の心を安からしむる事を思はしめ又父母の心をなつかしく思ひ候事心に絶不申候故是に至り候ては共に父母を思ひ共に落涙する事に相成候其の時私心中に父母を慕ひ候へば學ぶ者も亦愈先非を後悔致し忽ち改心の事に相成も有之候尤も斯くまで孝道に志し候ても其の樂みを樂みとし其の利を利とする心を恐しく思はざる族は聊か十日二十日の間に浮か／＼元の不孝に歸る者亦多く御座候元より育ち宜しき者杯右の如く父母を難有思ふ事に至り候へば其の心靜に相成四時の變動迄も能く考へ田畑植物等悉く能く心を用ひ身を慎み謙遜儉約を守り父母の耳目を樂ましむる事を好むに至り五人組前書仰せ渡され候趣愈難有思ふ事に相成則ち是を守り農業出精し自ら修身齊家の理を能く知る者も御座候元より志宜しからざる者は聲を

立て、泣く程に纒ら難有思ひ改心を致し候ても三十日も過ぎ候へば知らず眼前の事毎に迷ひ知らず元の不孝に歸る者多く御座候然れども三十日の中に又々導き右の所に至り候へば或は五十日も相保ち又其次は八十日も相保ちなど凡そ十有餘年も勉強して相學び漸く道の本意を學ぶ事に相成儀に御座候

或は室先生の性理と云へるは生れたる家を能く守り其外を望まず其の家業を能く守るべきの事故家業二重三重にては悉にして何れも懈怠と成り一業も立つ事無し是に於て強慾却て其の家を亡す理を詳に心得させ私門人に於ては家業二重を嫌ひ且其の生れたる家の業行を變替する事を忌み或は百姓は百姓相應の衣食住を守らせ杯或は人生るゝに十月の中母の體内に有て其の氣を稟くる故其の十月の間母の志す所によつて生るゝ子善惡邪正の差ひ有る理を悉く論し又母の心を穩かに持たしむるには其の夫の志に有る理を悉く論し候へば主の心の置きどころによつて子孫までの正不正との差ひ有る事を能く知り則ち改心致す事に相成るも有之或は惡きを改むるは宜しと知りつゝも深き淵に陥りたる

如く其の事に離れ難く改め得ざる者も有之或は性質は變らぬ者と心得居り候族は善惡共に事譚口にのみ知つて心に知らず且善き事を好みながら眼前の事に惑亂して終には己と己が罪を作る故其の志す所の惡きを改め善きに進むの爲めに門人同志議定して是迄己が不肖を耻らひかくし置き候事など腹藏なく心底打明け照し合せて相互ひに其の善と不善とを知り人の事にて己れを顧み候へば常に自分の事は惡きも善き様に思ひ暮せし事杯相知れ其の心の穢を洗ひ洗ふ事其の性質にとつて或は三四年或は七八年も躋きて本心の正しきに至らしむるの教に御座候

又愚俗は自分了簡を専らとする故性質の惡き者は何程學ぶとも善きに趣く事無し杯常に是を言ひて聖賢の言を疑ふ者粗々多くして生れ付き才人にすぐれたる者も幼稚の時よりは是等を開き是に移り居て唯空々寂々として暮す中に其の樂みを樂みとし其の利を利とする事に相成る者亦多く御座候是等に教へ候には萬物皆天地の和也故に人の命も心も則ち天地の和たる所以を諭し或は人心有り道心有り天地の和其儘の道心は四海に彌り性質狭量の者と雖も人慾の私を去れば則ち道心顯れて其相應する人々に彌り自分の勝手に離れたるもの故人心とは譬へば暑いか寒いか唯自分の身のみ思ふを云ふ其の狭き志故たわいも無き事に移り人心より知らず人慾の私と成る其の私盛んと成りては譬へば潮の涌き出るが如く是を止むる事を得ず漸々と惡を積み上げ終に大いなる災を引出す事にも至る其の道心の微なるに至れば人心知らず人慾の私と成るの危きを其の器量相應に形を引き或は朋友同志互に心の變化する味を考へては己れに當て少しにしても心に穢れ有れば卽刻洗ひ清め杯千變万化の中終には身の危きを知り終に人欲の私を去る事を専ら學ぶに至る儀に御座候是に至り候者へは其の學の進むに乗して天地の和は萬物を生育す性は其の和の實體にして聖人なれば天下を育ふ下愚と雖も其の志を得て以て五人や十人の家内の者の如き導き得ずと云ふ事無き筋々を分相應器量相應に心得させ候へば不孝不義に陷る發りも子孫滅亡の種を蒔く理も相分り愈々改心に志す儀に御座候是に至り候へば其のはずみに乗りて又始めの教方に歸り唯其の場限りの樂みより末の樂み其の時ばかり

の利運より末の利運其の場限りの孝行より行末の孝行杯と萬端末の見渡無ければ知らず危き事に至る味とを能く諭し其の人相應に心得させ候へば人の嘲り笑ふを忍び奸淫、飲酒、遊樂の族に移らず慎み守る事に相成る儀に御座候。私無學文盲に候故國々經歷の中諸先生の説を乞ひ受け程子朱子深切の教に縋り且聞き及び候藤樹先生の教方に縋り己れに勤めて人に及すの教諭仕候儀皆己れが心を學ぶの儀にて教導所則ち改心樓と名付け講釋の節は尙改心専ら志し出席致すべき旨門人共へ申入れ置く儀に御座候。

又少しの私にても是を改め人を導き度く心掛け候考へは先づ天地の和は其の物々を率て物々生育する所以を考へさせ候是を身心に當て考へ候事に至り候者共は五人組前書仰せ渡され候趣愈々難有相成父母の恩も愈々難有心得愈行狀正しくする事を好むに至る儀に御座候此の志と相成候者へは夫れ天地和して身命あり故に人たる者は分相應に天地の和の如く人々に彌るの志し有りたき者也と相教へ其の味ひ心に止る事に相成候者へ相諭し候には先づ人の見る所をば善し人の見ざる所の惡敷の顯はるゝ時に常に行狀善くとも

人は是を善しと言はず、故に必々先づ是を恐れ懼れ自分勝手は又心穢も戒め慎むべし又人の見ざる所をば尙能く勤めたる事杯顯はるゝ時は人の見る所に過不及の差ひ有るとも人は是を惡む事無し實に心安く樂み廣し杯相教へ是等耳に入り候族には此の理を以て人を教導する筋を能く教へ其の響に乘し又繰返して都べて口の先にて教諭する時は其の教諭を被る者道理を唯口に演ずる事は知れども是を勤め守る事を得ず故に先づ自身能く道を守り勤めて教ふべし其の勤を見て是に歸伏する者は道理を口に演ずる事は得ずと雖も道を守り勤むる事至るの筋々を詳かに相諭し尙々深く教導致し候には此の如き故家内の者を始め人々を導くには兎角口先にて教へんとすること勿れ人々を導くの爲にとて唯々人の見ざる聞かざる所をば尙私の穢れも無き様に終日守るに於ては所謂道心なれば道を修むるの所以にして則ち自然の教至る是を守る事に至れば主たる者召使ひ杯を自ら仁愛する事心に浮び仕はるゝ者も亦口にて教へずとも主人を心中に自ら尊敬して自然の義と成る又道心は志廣し志廣ければ父は子に溺れずして慈む子は父母に自ら能く事へて親みを止

む事無し夫は妻に情有りて溺るゝ事無し妻は夫を尊敬して情滿つるとも猥りには近寄らず寢間も飲食も共にするとも心中に別あり此の如きの志なれば兄弟の席も亂るゝ事無く朋友の信も失ふ事無し此の五つ何れも其の已れが心より自ら生じたる禮なれば所謂從順なるべし又求めて禮儀がましきは聊かの事の差ひにも其の禮忽ち亂るゝなり环私二十有餘年此の如く教導致し候儀にて是唯心の運びを考へ學ぶの事にして則ち心學に御座候然る處大學を以て教へ或は孝經を以て教へ或は心の理を知る爲に人物性格其の賦する所の理を得んとして専ら性理を學ばせ候故何時と無く人々性理學と唱へ又近來は人々唯性學と相唱へ候儀にて私風情無學文盲の名づけ候儀には無_レ之候又私教方の儀人々に應じて教へ候故言葉同じからず候へ共意味に於て是に差ふ事一切無_レ之此の外世に有りふれば教草物語等を以て相諭す儀に御座候

右教導筋御尋に付申上奉り候 以上

幽學ほどの人物であるから、言ふ事に偽りのあらう筈がなく、其の黑白は直ちに判明し得

るものなるに、理不盡にも幕末の汚吏之を辨へず、幽學に次の判決を下した。

幽學に對する言渡

漂泊の身を以て性理教會を創立し、多く門生を集め、一大教堂を建築したるは穩ならざるを以て、一百日間謹慎すべし。尙改心樓は速かに取毀つべき事。

安政四年 月 日

本 多 加 賀 守

滑稽と言はんか、暴戻と言はんか、人道の戰士として敬すべきを、穩かならずと貶し、表彰すべきを刑罰に付したるは、實に冠履轉倒の至りだ。

彼は謹慎の申渡しを受くるや、直ちに門下生に命じて改心樓を取毀たしめ、自分は東京小石川茗荷町高松彦七郎方にて謹慎を爲し、終日座を崩さず、あたかも獄吏の傍に居るが如くであつたと言ふ。七ヶ年の未決拘留後一百日の謹慎を終り、理想郷長部に戻り、高弟遠藤亮規の家に寓し、道友門弟等の心境性行如何を具に視察した。

然るに思ひきや、不孝者は現はれ、不義者は出で、家産を傾ける者は出来、賭博に耽り酒色に溺るゝ者續出し、二十年來心血を注いで來た理想の殿堂は何處にあるか。濟世救民の天業は地に落ちたか。幽學は血を吐くの思ひを爲し、輾轉反側、日夜懊惱、而かも天を恨み人を咎めず、只一念これ自分の罪である。何の顔を以て先哲賢人に對し得るか。亡き恩師提宗和尚に對し何の面目があるか。」との自責は灼熱の如く、最早一身を顧る暇はない。唯一死以て鮮血の教訓を垂れ、彼等を改悟せしむる外に取るべき途はない。

時正に安政五年三月七日、幽學は門弟一同を遠藤良左衛門亮規の宅に集め、嘗て信州の道友に送つた和歌、

別れても心はかよへ友人の

誠の道に隔てなければ

といへる一首を講じ「誠の道さへ踏みこんで行つたならば、たとへ幽明境を異にするも、魂は必ず相通ふものである。萬一道に離るゝ事あらんか、諸子は最早自分の門弟ではない。

自分は齡已に六十を越え、何時此世を去るやも計られないが、日頃自分の講じた道は必ず忘れてはならぬ。」と熱火の訓戒を加へ、暗々裡に永別を告げた。

翌朝に至り、幽學の姿が見えないので、門人等は驚いて百方搜索したところが、墓地の松の樹の下に自刃して居り、左の遺書を殘してあつた。

遺書

時に僕十八歳にして漂泊の身と成り、愈々師の傳を守り、不學ながら大學、中庸、孝經三書の微味幽玄を探り、學の爲めに國々の先生方に議論を乞ひ願ひ、性理を明めて以て愈人を導く事を念とし、淫犯、飲酒、遊樂の念を去り、己れに勤めて以て人を導く事を得、不孝子も孝子に至らしむる事年々歳々多きに至る。雖然僕が如き、人に用ひらるゝこと全く器に過ぎたる故、御上之御疑心を蒙り、御糺之上御疑心を晴させられ、僕過ち多しと雖も、御慈悲の御沙汰下し置かれ誠に以て難しき御儀に有し之、然處門人の中、埒も無く眼前の事に迷ひ、元の不孝に歸る者粗々相見え、此に於て第一には御上様

御苦難に相成り、其上にも御慈悲の御沙汰下し置かれ候事故、門人の中不孝に歸する者多く出来候ては、僕が一身置處なく又僕が教筋宜しく思召し候御方々へ、猶以て一分相立つなく、又門人の中元の不孝に歸る者多きに相成り、僕が教を爲せし故、御上様、御領主様、方々の御役衆中迄、御苦難に相成、門人には大金を費させ甲斐無し、彌々以て僕の不忠不孝の甚しきなり然らばとて過多分として人を教諭すべき謂れなし。此の三つのために自殺する者なり。僕を憐れむ心ある者は速かに志を改めて、孝を先とし修身以て自ら齊家の行のみ志し、必々不義の富貴は好まざる様堅く心得勤め給ふべく候。又此邊入門の人、行崩るゝ者少なく、志厚き情に引かれ、一度此地に來ると雖も、自殺は元より覺悟の處、今爰に至つて處々に不孝不正に歸る者追々出來するを見聞するに忍びず自殺致す事に候へば、幼より學びし者杯は猶更父母に心配掛けぬ様に、埒もなく眼前の事に迷ひ、不孝不義の名を採らぬ様、日一日と願み勤め給ふべく候。又門人中此上にも御上様御苦難に相成者出来候ては、又僕が不忠不孝の深みに陥る儀に候間、若し右様

の者有らば信義以て改心させ給ふべく候。然しながら己れに勤め得ざる事杯は強て人を誠しむる事勿れ、唯眞實の談話にて改心させ候様頼み置き候如件

安政五年三月八日

大原 幽 學

此邊道友中

尚幽學は父より賜はりたる金三圓を常に胴巻に納め、肌身を放さなかつたが、此の金子に付き次の書を残した。

一金 三兩也

右は拙者自殺に付入用の足金に致し下され度候

大原 幽 學

當村 役人 中

幽學自殺するや、幕吏は檢死した。白絹の下着に黒絹の上着を着し、白の帯に小倉生地袴を着け、十八才で國を去つた時父より賜つた河内守祐國の大小二振を傍に置き、腹を十文

字に搔切り、然る後襟を正して咽喉を突き、終つて九寸五分を三寶の上に置き静かに瞑目したのであつたが、その面には笑を含み、恰も生けるが如くであつたといふ。其の九寸五分の銘に「難舍者義也」の五字が刻んであつた。幕吏は幽學の雄々しさに驚き、自分は今まで廿有數回の檢視をなしたが、未だ斯くの如き立派な最期を遂げた者を見たことがない。」と嘆息したといふ。

又、幽學の手箱の中には門弟等に贈與すべき大小、短冊、掛軸等の物品に一人毎にその名を明細に記して入れてあつたと言ふ。

聖者幽學は何のために自叙したか。實に彼は門下生に我が身を肉弾として投げ付け、我が鮮血を以て、彼等に最後の洗禮を授け、以て彼等の心中に革命を起したのである。實に彼の血は彼の教訓の結論を爲した。眞に義人の死である。

幽學の死はキリストの死に髣髴たるものがある。

キリストは野の聖者ヨハネより水の洗禮を受け、天來の使命を感じ、四十日四十夜斷食し

て沈思黙考の末、決然立つて自己の王國建設に着手した。先づ十二人の門弟を選定し、之に天業の秘機を授け、爾來三年間東奔西走烈火の如く奮闘した。

キリストの名聲天地を揺がすものがあつた。この澎湃たる民間勢力に對し、時の権力者如何で黙すべき。キリスト身邊の危険は刻々迫つた。天魔は遂に十二人の門弟の一人ユダに入り、彼は金の爲に恩師キリストを賣つた。これ正に幽學の捕はれたると同一徹。兩人共に人を救ひ世を救はんとし、却つて己れを殺さざるを得ざる命數に陥つた。實に人生の不可解の神秘である。遂に門弟等は恐怖と失望の極四散した。

勇敢にしてキリストに愛せられた勇者ベテロすら目前にキリストの囚はれを見ながら、我れ此の人を知らずと三度までも拒絶した。

幽學が七年間幽囚せらるゝや、二十年來養ひ來つた門弟等が失望の餘り四散し墮落したと同一の過程である。

キリストは十字架上に於て哀れな最期を遂げたが、愛する門弟は捨て難く、自己王國の實

現は忘る能はず、復活して再度彼等に天業の秘機を授け昇天した。(此の處宗教の天機に屬す)

幽學は百日の謹慎を終へて長部村に歸り、門弟の墮落、風俗の頹廢を見ては悲憤やる瀬なく、如何にもして之を回復せんと千々に思ひを碎いたが、大度は已に傾いた。最早施すべき術はない。去つて世を捨て山に逃れんか、恩師提宗和尚の言は今猶耳裡を去らない。偉人は死處を選択する。

彼自ら爆弾と爲り、門弟を根柢より爆發せしめんと、茲に自刃を決行した。門弟等は目のあたり之を見、心底より激勵し、尊き師の姿に三拜九拜、斷じて師の精神に生きんと誓つた。

キリストが復活して失望落魂の門弟等を激勵覺醒したと同一、只宗教と道德の領域の差あるのみ。

キリストの大使徒ポーロがキリストの死について「それ義人のために死ぬるもの殆となし、仁者のために死ぬることを厭はぬ者もあらん、然れど我等がなほ罪人たりし時、キリスト我

等のために死に給へり」と言つたが、それは幽學が「死を以て徒を諫めた」のと同様の通ふ處があらう。

百年後の今日に至つて、幽學の崇拜者が續出するのは尤だ、と云ふことが出来よう。

第七章 東總の地に小幽學の輩出を望む

我が郷土、東總の地、深山大澤あるにあらず。英雄俊傑出でしにあらず。高僧碩儒生れしにあらず。極めて平々凡々、幾千歳の間無爲にして來り、無爲にして去りしに過ぎない。

然るに不思議にも今を去る約百年前、一の大原幽學を迎へ、之に師事した。其の門弟約六千人、封建の末期、天保水滸の風腥き暗黒時代、道徳も、人倫も、禮節も、情誼も、悉く地を拂うた其の眞中に於て、彼等は卓然として時流の上に立ち、人は天地の和の別神靈たりとの幽玄の哲理を味ひ、天人一如の眞境に入り、やがて物心の調和を計り、道徳と經濟との融合を劃し、師と共に濟世救民の天業にいそしみ、一個の理想郷の實現を志した。正に神の選民の觀を呈した。吾人は幽學の偉人たるを仰く毎に、郷土の先輩の心底に潛む一個崇高なる靈光を看過する事は出来ない。

實に幽學をして幽學たらしめたものは彼等である。彼等なくんば幽學なしといふも過言で

はあるまい。

今や幽學の研究日を遂うて盛んになり、崇敬者日に増し來り、やがて日本的に勃興せんとする機運になつて來た。誠に慶賀すべき至りではあるが、これを單に研究、單に崇敬に止ましめてはならない。

余は特に敬愛する郷土北總の人士に訴ふ。郷等の中より眞に天地の和の別神靈の自覺に立ち、自ら小幽學を任じ、非常時日本の濟世救民を念願する志士多數輩出するに非ずんば、郷土に注げる幽學の鮮血を無意味に終らしむるではないか。特に幽學に師事し、理想郷建設にいそしんだ先進の士に申譯なき次第ではないか。

昔頼山陽、天才を抱き、青年時代湊川に詣で、楠公の跡を弔うて追慕の情禁じ難く、左の一詩を賦した。

攝山透 遼海水碧。

吾來下馬兵庫驛。

想見訣兒呼弟來戰此。

刀折矢盡臣事畢。

4

北向再拜天日陰。

七生人間滅此賊。

碧血痕化五百歲。

茫茫春蕪長大麥。

君不見君臣相鬪骨肉相吞。

九葉十三世何所存。

何如忠臣孝子萃一門。

萬世之下一片石。

留無數英雄之淚痕。

攝山逶迤として海水碧なり。吾來りて馬より下る兵庫の驛。想ひ見る兒と訣れ弟を呼び來りて此に戦ひ、刀折れ矢盡きて臣が事畢んぬ。北に向ひて再拜すれば天日くもる。七たび人間に生れて此の賊を滅さん。碧血痕は化す五百歲。茫茫たる春蕪大麥長す。君見すや君臣相鬪り骨肉相呑み、九葉十三世何の存する所ぞ。何如んぞ忠臣孝子一門に萃り。萬世の下一片の石。無數英雄の淚痕を留むるに。

楠公の一族は皆盡忠の一念に燃えて消えた。最早日本に楠公の子孫無く、其の後を弔ふ血族一人もない。萬世の下唯残るものは湊川に於ける一片の石あるのみであるが、此の石には幾多無數の志士、仁人の血涙が注がれて居る。やがて此の一片の石に感激し、幾多の小楠公

出で、大楠公の精神を復活せしむるに相違ないとの山陽の詩旨であらう。

實に其の通り、明治維新回天の鴻業は五百四十年前の大楠公精神の再現とも言ふべく、現時日本精神の再興は全く楠公精神の再興とも云ふ可きである。

幽學は父に對する一諾の下に子孫を残さず、身を保つゝの嚴正なること、楠公の如く血族として其の跡を弔ふ者一人も無い。只彼は「予が死後は墓碑の要なく、唯一本の榊を植ゑよ、五十年後に落葉を拂ひ、其の後を弔ふ者無くんば語るに足らず、百年後に至らば自分を知る者出で來らん。」といひ、自己が百年後の生命を豫想して居た。幽學歿後百年に垂んとする今日、行きて墓上の榊を見るに、樹下常に清掃せられ、來り弔ふ者日に増し、幽學の餘徳月日の立つに従ひいよいよ輝くを見る。

淡川に於ける一片の石を追想し、幽學の墓前に於ける一本の榊と思ひ比べ、五百歳の時代を隔て、兩者靈犀相通するものあるを覺える。

楠公が笠置山の行在所に於て、後醍醐天皇に對し奉り、恐れ畏みて「一旦の勝負をば必ず

しも御覽せらるべからず、正成一人猶生きてありと聞召され候はゞ、聖運遂に開かるべしと思召され候へ」と申上げ、歡慮を安んじ奉り、一身を以て天下の安危を背負ふ大決心を爲し爾來楠公の一生を通じ、其の一族を通じ、これが指導精神となり、最後に七生報國を念じて戦死された如くに、幽學が十八歳の折、父への一諾と、三十四歳の時提宗和尚の一喝に依り自得したる哲理を指導原理として、救世済民の天業に一身を捧げ、やがて自刃して門弟に鮮血の教訓を垂れたのである。

長部の丘陵に在る大原幽學の遺跡を訪ね、上り上りて頂きに達する所、古色蒼然たる一樹の榊を見る。之に面して瞑目合掌、思ひを百年以前に馳せ、幽學が鮮血の教訓を偲ぶ時、誰か感激の涙を催さざる者やある。此の感涙こそやがて小幽學輩出の縁を爲すものにあらずや若し山陽をして今日あらしめば、千古の名詩を以てこの古榊を歌うたであらう。

理想の殿堂將に大成せんとして天彼に自刃を命ぜしは、彼の英魂を永へに生かさんとする天意にあらずや。

幕末安政の大獄に於て、勤王の權化たる蓋世の英傑、吉田松蔭、橋本左内、賴三樹三郎等幕府の暴虐の爲め無慘斬首せられた。彼等は幕末に新日本建設の理想に燃え、身を粉にして戦つたもので、日本の今日あるは彼等に負ふ所多大である。斯の如き尊き人傑を天は何故幕末汚吏の刀の露と化せしめたか、然かも橋本左内の如きは廿六歳、吉田松蔭の如きは二十九歳の青年に過ぎない。彼等の天分は一半だも發揚されない。若し彼等をして天命を全うし、思ふ存分、其の天分を發揮せしめなば、日本の歴史は大なる變化を來し、日本文化は一段と世界人類に貢獻する所あつたらうと思ふ。然るに此等忠魂義膽の大精神は、事半にして幕吏の暴虐に蹂躪せられ、遂に千古の恨を呑んで空しく刑場の露と歸した。實に彼等は現世的に世俗的に無慘の敗北者と爲つた。實に天意の知り難き所である。

然れども、此等青年志士の死が天下に大なる衝動を與へ、感奮、慷慨の正氣は天下に漲り遂に幾多の小松蔭、小橋本、小賴三樹の出現と爲り、爲めに幕府の大廈は支ふる能はずして倒壊し、明治維新の回天の鴻業は大成した。

加之、彼等英傑の精神は今日に至るまで、日本精神を鼓舞し、今日幾多有爲の青年が彼等を追想し奮起して居る。日清日露は元より、現時滿洲事變等に於て幾多忠烈の精神の源と爲つて居る。

此に至り天意の再び深遠幽玄、到底人智を以て測り知り難きを覺ゆ。幽學の鴻業は空しく蹉跌したれど彼の難舍者義也と銘せる名刀を以て一閃屠腹、その逆れる鮮血は、必ずや幾多の幽學を輩出せしめずには止まぬであらう。これ天意の測り難き幽玄と思ふ。

今や日本は有史以來の非常時、幽學の如き、眞個の大丈夫を待望するや切である。余は特に東總の天地に幽學を復活せしめ、幾多小幽學の輩出を望んで止まない。これ六千の小幽學の子孫として當然持つべき矜恃ではないか。幽學の靈感再び我が郷土に下り、鮮血の洗禮を授けられん事を切に望むものである。

目下地方の有志、幽學を慕ふの餘り、大原聖殿の建設を企つ。良い哉、その企圖。左に其の趣旨を轉載しよう。

東總の地に小幽學の輩出を望む

一一四

大原聖殿創建の趣旨

偉人大原幽學先生我が北總の地に教を敷くこと多年終に道義に殉じ死を以て後世に垂訓せられしより茲に七十八年昭和三年 今上天皇陛下御大典を擧げさせられし時に方り聖恩優渥草莽の枯骨に及び先生亦賤位の恩命を拜せらる某等感激何ぞ勝へん

方今人文日に就り月に進み外觀の美顔る備れりと雖も物質文化に偏重して精神文化の振興を見ず質實剛健の風日に衰へて輕佻詭激の俗滔々として到らんとす畏くも 先帝宸襟を惱ませられ給ひ精神作興の大詔を煥發せさせられ 聖上亦登極の後直ちに教育の御沙汰書を賜はせらる臣子たる者誰か恐懼感奮せざらんや抑も先生の教義は主として精神教育にあり孝悌忠信に基き知行合一實踐躬行を體とし道徳と經濟との一致調和を用とせられ進んで理を窮め性を盡し天人一和の境地に達せんとするものにして幽玄の哲理を平易簡明に解説し以心傳心誠を致して自得せしむること神にして之を化するの妙あり某等曠古の大典を仰觀し恩命を拜するに至りて恐懼措かず茲に同志相圖りて聖殿を創建し誠

を盡し敬を捧げ之を祀りて大に先生の教義を弘布し上は聖明鴻恩の萬一に報い奉り下は隠れたる偉人を天下に紹介して聊か世道人心の爲に貢獻せんとす

今や思想國難に經濟國難に將た非常時艱に際會し之を匡正し之を打開し内に國民をして其の所を得しめ外に皇國の勢威を進揚して世界の平和を確保せざるべからず憂國の士人朝野の識者皆健全なる思想の善導を希望して己まざるなり

願はくは海内同志同感の士君子此の學を贊助し奮つて淨財を喜捨し某等の志業を完成せしめられんことを

昭和十年 月

大原幽學の本領

【不許複製】

昭和十年十二月十三日印刷
昭和十年十二月十五日發行

【定價金七十錢】

著者兼
發行者

長 戶 路 政 司

印刷者

千葉市寒川九〇六(電一、二二一)
千葉印刷株式會社

代表者 大 橋 榮

發行所

關東學園出版部

千葉市寒川二八九一番地
電話千葉一一八番